

地水火風

牧野 恒一

年末、政府の地震調査委員会が、千島海溝沿いで起こる超巨大地震の今後30年間の発生確率が最大40%と推定される、と発表した。東日本大震災級の大地震の発生も懸念される。

北海道東部の太平洋岸では、17世紀初頭にM8・5を超える超巨大地震にまさコミも「そんな超巨大地震が本当に起こるか?」と半信半疑の扱っていた。

北海道東部の太平洋岸では、17世紀初頭にM8・5を超える超巨大地震にまさコミも「そんな超巨大地震が本当に起こるか?」と半信半疑の扱っていた。

あつて、「最近では17世紀に発生しているので、次の巨大地震と巨大津波は来世紀のことになりそうだ。東海・東南海エリアに比べて人口の集積が少ないせいか、100年後布湿原、藻散布沼で行われる。」

たところに、今回「発生確率40%」などと報じられたため、あわてて地震調査委員会の報告書を読んできた。

調査委員会では、霧多布湿原、藻散布沼で行われる。

千島海溝沿い超巨大地震の30年確率最大40%の衝撃

千島海溝沿い超巨大地震の切迫性

この超巨大地震について、06年12月10日付け本紙拙稿「千島列島沖地震の津波と500年間隔発生自体はほぼ確実」と地震」で言及している。

とされている)から既に400年近くが過ぎていくことを考えると、その切迫性を懸念せずにはいられない。

一方、根室沖地震は、M7・8、M8・5で、1843年、1894年、1973年に発生しており、平均発生間隔は約65年、今後30年間に発生する確率は70%、50年以内では何と90%以上だという。2003年の十勝沖地震は1952年の震源

12月19日に、政府の地震調査委員会が、北海道東部の千島海溝沿いでM9クラスの超巨大地震が切迫している」と発表された。今後30年以内の発生確率は70%とされて

この超巨大地震について、06年12月10日付け本紙拙稿「千島列島沖地震の津波と500年間隔発生自体はほぼ確実」と地震」で言及している。

この地震調査委員会の報告を契機として、巨大地震と巨大津波の怖さをもう一度思い出し、我が家の地震対策に本腰を入れた。年初に、改めてそう思う。

この地震調査委員会の報告を契機として、巨大地震と巨大津波の怖さをもう一度思い出し、我が家の地震対策に本腰を入れた。年初に、改めてそう思う。

北海道東部の太平洋岸では、17世紀初頭にM8・5を超える超巨大地震にまさコミも「そんな超巨大地震が本当に起こるか?」と半信半疑の扱っていた。

調査委員会では、霧多布湿原、藻散布沼で行われる。

約1000〜8000年とばらつきがあり、平均発生間隔も約330〜590年と、様々な推定結果がある。本評価では北海道厚岸郡の調査結果を用い、平均発生間隔を約340〜380年と推定した」などという記述もある。思わず、「そうか、発生間隔がもっと長いかもしれないんだ」などと、都合のよい方に考えたが、自分がこわい。

南海トラフ地震の発生確率は今後30年間で70%とされており、根室沖地震よりはるかに高く、首都圏への影響ははるかに大きい。